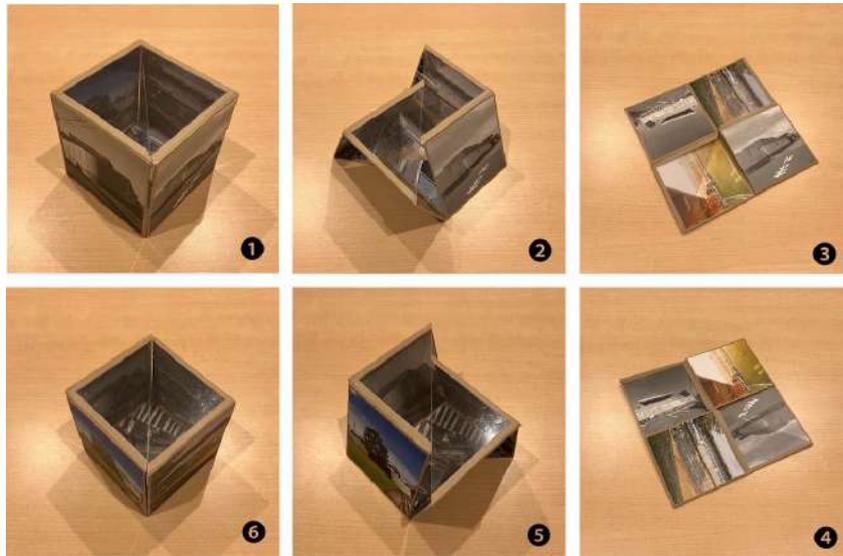


築裏ムスニマ子スネサリヤコノ

(断章“ノコギリヤネのある風景” その14)



▲墨会館のおモテとウラをひっくり返す（裏返る墨会館）

ノコギリアン・ガッカイ 2022 (2022.12.15～2023.1.19) のテーマは、「私(ム)が開いて(ハ)、「公」になる」。私物のノコギリヤネが開き、まちに豊かな公共性を取り戻すことを目論むものである。

「墨会館のおモテとウラをひっくり返すと何か見えてくるんじゃないか」

マスミダカラスの口車に乗せられて、ネットで発見した「裏返る立方体」を模して、「裏返る墨会館」を制作した（写真上）。

ガッカイの最終日、のこぎり二に隣接するゆたかふえて、十名程度の小さな集会を持った。ゆたかふえのノコギリヤネは、参加者の「私」を開かせてくれる空間となった。そして、お二人の方が、その後、まさに「私が開いて公になる」行動を展開されたことに驚かされた。

おひと方は、三月の中旬、起の歴史民俗資料館で「尾張弁のある風景展」を開催された三十代の女性である。おばあさんとの絵手紙による交流を契機に、ノコギリヤネのコウバで遊んだ体験を、本職のイラストに尾張弁を添えて、ご家族のノコギリヤネ物語として開示された。

もうひと方は、四月の初め、昨年につき、ご自宅の中庭でお花見会を催された。尾州の繊維産業を牽引されて来られた方のお屋敷と庭の織りなす空間は、ガチャ万時代からの栄華の結晶と言えるかもしれない。

遊び場としてのノコギリヤネと繊維産業の繁栄が結実したお屋敷と庭。埋もれた私的空間の中に、未来が開けてくるようだ。半世紀を経て、ノコギリヤネとともに、ガチャ万を裏返す（ひっくり返す）時が来た。

ノコギリアン（神奈川県藤沢市在住／ノコギリアン・コウバを主宰）

1. コウバと原っぱ

これが「裏返る墨会館」か。立方体のオモテとウラが翻るだけでなく、透明の一面から中庭が覗けるのがアイデアだな。それで、オマエは、ここから何が見える？

まあ、そう急くな、マスミダカラス。その前に、オマエの力を借りてもう少し考えてみたい。マスミダスコープ（マスミダカラスが映し出す特殊映像）で見せてもらいたいものがある。

先に、墨会館周辺の三つの時代の俯瞰映像を見せてもらった。上空から見ると、ノコギリヤネが判別できて面白い。そこに映っている建物と工作物を黒く塗りつぶしてくれないか。オモテとウラ（ウチとソト）をひっくり返すヒントが得られそうだ。

珍しく、マスミダカラスは素直に要望に応じてくれた。

黒いところがウチで白いところがソトになる。時代は半世紀以上も前、ノコギリヤネの全盛期だ。ワタシがまだ小学生の頃だろうか。ガッチャン、ガッチャンと聞こえてくる。黒い「図」には多くのノコギリヤネが含まれている。大人たちはそこで仕事に従事している。

一方、子どもたちの居場所は、神社やお寺の境内、収穫を終えた田んぼ、そして、原っぱ…。公園なんて気の利いた遊び場なんてなかった。まだクルマの少ない時代には、「みち」も自由な場所だった。白い「地」の部分、遊び場だった。

この時代、まちの元気は、コウバと原っぱから生まれたのかもしれない。特に、使い途の定まっていない原っぱは、何ものにもなれる可能性を持っていたと言える。



▲ 1970年代のノコギリヤネの生まれるまち（建物、工作物を黒く表示。グリッドは100m）

2.ゼロ年代のまち

今度は、2000年代の映像を出してくれないか。そこに、先のノコギリヤネの全盛期の映像をグレイにして重ねてみてくれ。

注文の多いヤツだ。時代を重ねて、変化を見るということか。ほぼ三十年の時間の隔たりがある。家族では、ひと世代、違うことになる。

バブルの崩壊が1991年だった。その後の経済後退、停滞の時代は失われた十年とも二十年とも呼ばれる。それを反映するかのように、多くのコウバラしきものが消滅したように見える。そして、その跡地とともに、われわれの遊び場であった原っぱ、農地などの空き地は住宅地に分割されていった。繊維で栄えたコウバのまちが均質な住宅地へと変貌していく。

その一方で、墨会館の後に建設された技術研究所、センタービルも残っており、オワリの繊維産業の栄華を誇った「艶金」の最後の勇姿を見ることができる。

2000年代は、時代を区切る意味合いで、ゼロ年代といわれる。この地域ではノコギリヤネが取り壊されてゆき、まちから原っぱが消えた。「ゼロ年代のまち」は、「ノコギリヤネのある風景」の分岐点といえるかもしれない。農村集落から機業のまちへと展開した共同体が崩壊するとともに、原っぱのような何ものでもないものは、まちから排除されていった。

ゼロ年代に「ゼロ」が消えてゆくということか。皮肉だな。



▲ 2000年代のノコギリヤネの消えてゆくまち（1970年代を重ねる）

3. 「からっぽ」の行方

そして、現在のまちになる。住宅地としてさらに細分化されていく。空けておくことが無駄だと言わんばかりに空白の利用が進む。それが、都市計画による土地利用の合理化、効率化というヤツだ。原っぱ、オープンスペースという「からっぽ」が消えていく。「ゼロ」が消えたまちだ。

じゃあ、こんなのはどうだ。裏返してやろう。

マスミダカラスは、映像を反転させた。白と黒を入れ替えたのだ。建物が白くなり、空地が黒く映し出された。ゲシュタルト心理学に出てくる「図と地の反転」である。

白くなった建物が、「からっぽ」に見えるじゃないか。こんなに「からっぽ」がいっぱいある。新たに住宅地が増える一方で、古いものは空き家になっていく。

思わせぶりだな、マスミダカラス。こう言いたいんじゃないか。「からっぽ」は、かつては、まちという共同体で所有していたが、公と私に明確に区分され、かつての共同体も消滅し、「からっぽ」は私的な空間に入り込んでいると。

やはり、そう思うのか。私を開けと？

さあ、どうだろう。これは、ひとつのお遊びだよ。そもそも、本当に「からっぽ」が、オマエの言うような創造の根源となり得るものなのか。



▲ ノコギリヤネの残る現在のまち（図と地の反転）

4. 翻るノコギリヤネ

半世紀前、原っぱという「からっぽ」がまちのいたる所にあった。子どもたちは、そこでいろいろな遊びを生み出した。あるいは、コウバが立ち、仕事が生まれた。農村共同体が、機業を軸にまちの持続を担ってきたが、その共同体とともにまちから消えていった「からっぽ」は、個人、家族の私的空間に入り込み生き延びた。それこそ、ガチャ万の遺産かもしれない。立派な屋敷や庭園のカタチをとることもあるが、多くのノコギリヤネには、家族の記憶というカタチで残されているのだと思う。

家族の記憶がガチャ万の遺産だということか。

「裏返る墨会館」から見えてきたことがある。これは、中庭という「からっぽ」を裏返すことだった。墨会館の施主は、建築家に園遊会の開催できる場所を要求した。ウチとソトをひっくり返すことは、私的空間をまちに晒すことであるが、逆に言えば、まちをウチに引き込むことでもある。建築家は、内外の人たちの交流を通じた創造の場を想定したのかもしれない。

同じように、ノコギリヤネは家族だけでなく、仕事を通して、多くの人たちとの交流空間であった。創造拠点となり得る「からっぽ」としての可能性はあると思う。

サクラの季節も終わってしまったが、ひとつ余興を思いついた。風になびいて「翻るノコギリヤネ」というのはどうだ。現存するノコギリヤネをサクラに見立てたものだ。満開のサクラか、あるいは風に舞うサクラか。どちらだろうな。散り際の美学もあるかもしれない。



▲ ノコギリヤネの花開くまち（1970年代の市街地とサクラの花に見立てたノコギリヤネ）

○エピローグ：あらためて、「私が開いて公になる」を問う

冒頭で紹介したお二人、実家のノコギリヤネを舞台に家族物語を開かれた宮田さんにご自宅の庭園でお花見を催された伊藤さんに関して補足しておこう。実は、この先、対照的な展開になりそうである。宮田さんのノコギリヤネは、その歴史に終止符が打たれる。マスミダカラスの言葉に倣えば、さながら散るサクラというところか。いや、聞くところによれば、このまま終わりではなく、物語には続編がありそうだ。かたや伊藤さんのお屋敷と庭園は、オープンガーデン的な活用の検討が進んでいると聞く。どちらも、この先の展開が楽しみである。

十年程前、当時の民主党政権（2009.8～2012.12）下、「新たな公」（「新しい公共」）の議論がなされた。遡る十年前に成立したNPO法の流れを受けたものであり、「公と私」は古くからのテーマであった。しかし、実際のまちはどうなっただろう。行政の整備する公共空間は、「管理された空間」であり、民間の提供する公的空間は、収益をとまなう遊園地化せざるを得ない。

かつての「原っぱ」のような、生気に満ちた空間は、現在の仕組み、制度の中では生まれまいだろう。期待したいのは、市民、民間という漠とした存在ではなく、「私」という明確な主体である。家族の記憶が詰まった私的空間の豊かさが、まちに生気を回復してくれるのではないかと期待している。「私が開いて公になる」と考える所以である。

ところで、「裏返る墨会館」は、ノコギリヤネ・コウバ（のこぎり二）に常設展示している。裏返す秘訣は、逆らわないことである。畳める方に畳んで開き、また、畳める方に畳んで開くことで、ウチとソトが裏返る。ぜひ、お試しあれ。ノコギリヤネもナカニワも、「私」という主体が伴ってこそ、開くものは自ずと開くと思われる。

蛇足であるが、本手記のタイトルは、前作「ノコギリヤネとモダニズム建築」を裏返したものである。「読めない」という意味では、ノコギリヤネの未来と同じかもしれない。マスミダカラスの悪影響で、悪ノリしすぎたかもしれない。

2023.4.19（清明・虹始見／せいめい・にじ はじめて あらわる）



▲ まちに埋もれた「からっぱ」（2023.4.2 伊藤邸にて。©二坪の眼）